

7 術前化学療法を施行した、大腸癌手術症例の検討

岩谷 昭・山崎 俊幸・眞部 祥一
 堅田 朋大・須藤 翔・池野 嘉信
 豊田 亮・横山 直行・桑原 史郎
 大谷 哲也・片柳 憲雄・橋立 秀樹*
 新潟市民病院消化器外科
 同 病理診断科*

術前化学療法を施行した大腸癌手術症例について検討した。2006年1月から術前化学療法後に手術を施行した初発大腸癌は9症例だった。レジメンは全例 Oxaliplatin-base で FOLFOX が 2 例, SOX が 3 例, XELOX が 4 例だった。分子標的薬はベバシズマブ 5 例, パニツムマブ 1 例使用した。化学療法施行期間は中央値で 83 日, 全体の効果判定は PR77%, PD 症例はなかった。局所進行直腸癌は 4 症例あり, 3 例で PR, いずれも根治切除が行われた。肝転移症例は 5 例あり, 4 例で PR, 4 例で根治度 B の手術が施行された。1 例は肝再発あり再切除し, 1 例は肺転移のため化学療法中である。肝切除 5 症例の手術時間中央値は 369 分, 出血量は 2015ml, 術後在院日数 15 日で, 大きな合併症はなかった。

Oxaliplatin-base の術前化学療法は, 治癒切除を目指す上で有用である可能性がある。

8 新潟県における多施設共同臨床研究『大腸癌肝転移例（肝転移度 H2, H3）に対する XELOX + ベバシズマブ併用療法による肝切除の検討』の中間報告と当科の経験

亀山 仁史・飯合 垣夫・野上 仁
 島田 能史・下田 傑・八木 亮磨
 田村 博史・畠山 勝義・瀧井 康公*
 新潟大学医歯学総合研究科消化器・一般外科
 県立がんセンター新潟病院外科*
 新潟大腸癌化学療法研究会 (NCCSG)

新潟大腸癌化学療法研究会は, 肝転移度 H2, H3 大腸癌肝転移限局転移例 40 例に対し, XELOX + ベバシズマブ療法を行い, 肝切除の可否を検討する第 II 相臨床試験 (NCCSG05) を実

施中である。2011年9月までにプロトコール治療が終了した 17 例の中間報告を行う。また当院における XELOX + ベバシズマブ療法著効 2 例についても報告する。NCCSG05 の中間報告として, 奏効率は 82.4%, 肝切除に至った症例は 9 例で 52.9%。Grade 3 以上の有害事象は好中球減少が 18%, 神経障害が 10% でみられたが, 重篤なものはない。肝切除例では術中合併症はみられず, 術後合併症として膿瘍形成を 1 例認めたのみで, 安全に手術可能であった。当院で経験した同時性多発肝転移を有する結腸癌症例 2 例では, 2 症例とも, XELOX + ベバシズマブ療法により肝転移巣は PR となり, RO 肝切除が可能であった。現在まで無再発生存中である。

Ⅲ. 総合討論

新潟県の大腸癌化学療法の現状

～アンケート調査の結果から～

新潟大学医歯学総合研究科消化器・一般外科
 下田 傑

新潟県内の 52 病院の消化器内科・外科医師にアンケートを送付し回答していただいた。回収率は 21.8% (内科 12.5%, 外科 26.6%) であった。根治切除不能・再発癌の一次治療ではオキサリプラチンベースのレジメンが, 二次治療ではイリノテカンベースのレジメンが第一選択として多く挙げられていた。また分子標的薬を併用する回答が大多数で, 多くをベバシズマブが占めていた。Stage III a および III b ではほとんどの回答者は術後補助化学療法が必要と考えており, 根治切除不能・再発癌に比べ経口薬の使用率が高かった。Stage II で術後補助化学療法が必要と考えられるのは穿孔, 悪性度の高い組織型, 脈管侵襲などであった。新潟県ではほとんどの施設で大腸癌治療ガイドラインに沿った治療が行われていた。大腸癌化学療法の進歩に伴い, 消化器内科医・外科医の負担が増えている。大腸癌化学療法における腫瘍内科医の育成を望む声が多かった。